

Prajnapradipaに引用されるMadhyantavibhaga第1章 第3偈の解釈 : アヴァローキタヴラタの解釈をめぐ って

著者	新作 慶明
著者(英)	Niisaku Yoshiaki
雑誌名	印度學佛教學研究
巻	60
号	2
ページ	975-972
発行年	2012-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000648/

Prajñāpradīpa に引用される Madhyāntavibhāga 第 I 章第 3 偈の解釈 ——アヴァローキタヴラタの解釈をめぐって——

新 作 慶 明

1. はじめに *Madhyāntavibhāgakārikā* (以下『中辺論頌』) 第 I 章第 3 偈は、瑜伽行派においてもっとも重要な偈の一つである。しかしながら、その『中辺論頌』I-3 は当該偈に対するヴァスバンドゥ作の注釈 *Madhyāntavibhāgabhāṣya* (以下『中辺論釈』) が簡素なこともあって難解であり、明確な解釈は得られていないように思われる。本稿では、バーヴィヴェーカ作の *Prajñāpradīpa* (『般若灯論』) に引用される『中辺論頌』I-3 をアヴァローキタヴラタ作の注釈 *Prajñāpradīpatīkā* (『般若灯論広注』) とともに読み解き、当該偈の解釈について『中辺論釈』と『般若灯論広注』とを比較考察する。また、両者の『中辺論頌』I-3 解釈が、『中辺論頌』の文脈上妥当であるかについて検証することも考察の範囲とする。

2. 問題の所在—『中辺論釈』における『中辺論頌』I-3 解釈— まず、はじめに『中辺論釈』における『中辺論頌』I-3 解釈を見てみよう。

『中辺論釈』(太字は『中辺論頌』)

対境・有情・我・表識の顕現として識は生じる。それ(識)の対象は存在しない。それ(対象=所取)が存在しないので、それ(識=能取)も存在しない。(I-3)

その中で、対境の顕現としては、[識は]色などのものとして顕現する。有情の顕現としては、[識は]自・他の相続において五根として(顕現する)。我の顕現としては、[識は]汚れたマナス(として顕現するの)である。我に関する迷妄(我癡)などと結びついているのであるから。表識の顕現としては、[識は]六識(として顕現するの)である。それ(識)の対象は存在しないとは、対境・有情の顕現には形象が存在しないので、また我・表識の顕現は誤った顕現であるので、それ(対象=所取)が存在しないので、それ(識=能取)も存在しないとは、その所取、[すなわち]色など(六境)・五根・マナス・六識といわれるものの四種、それ、[すなわち]所取である対象が存在しないので、それ[すなわち]能取である識も存在しない¹⁾。

上の『中辺論釈』には難解な箇所が二つある。その二つとは、(I) 識の「対象」が存在しない理由のうちの、「対境・有情の顕現には形象が存在しないので(anākāratvāt)」と説かれる箇所と、(II) 所取が対境(六境)・有情(五根)・我(マナ

Prajñāpradīpa に引用される Madhyāntavibhāga 第 I 章第 3 偈の解釈 (新 作) (151)

ス)・表識(六識)と能取が識と解釈される箇所²⁾とである。本稿では、(II)の問題について『中辺論釈』と『般若灯論広注』とを比較考察するのであるが、ひとまず『中辺論釈』に説かれる所取・能取解釈を確認しておこう。

- (1) 対境(六境)・有情(五根)・我(マナス)・表識(六識)として識は顕現する。「それ(識)の対象は存在しない」の「対象」(所取)は、対境・有情・我・表識なる対象と解釈されている。
- (2) その対境・有情・我・表識なる対象(所取)を把握するもの(能取)が識と解釈されている。

3. 『般若灯論広注』における『中辺論頌』I-3 解釈 『般若灯論広注』では、第 XXV 章における瑜伽行派の前主張に『中辺論頌』I-3 が引用される。

『般若灯論広注』(太字は『中辺論頌』, 下線は『般若灯論』)

あるいはまたもし、対境・有情・[我]³⁾・表識の顕現として識は生じる。それ(識)の対象(外界の対境=所取)は存在しない。それ(外界の対境=所取)が存在しないので、それ(能取)も存在しないと、このように『中辺分別論』の中に]出ているので、対象は存在しないので、因相(*nimitta)として把捉されるものが成立しないと[瑜伽行派の人たちが]考えても、その意味は説明されがたいと[バーヴィヴェーカがいつているの]は、あるいはまたもし、瑜伽行派の人たちが『中辺分別論』の中に、「対境といわれる五境⁴⁾・有情といわれる五根・我といわれる汚れたマナス・表識といわれる六つの現行識の顕現として識は、[すなわち]他ならぬアーラヤ識は、それら(対境・有情・我・表識)の形象として生じることに尽きるのであって、それ(識)の対象、[すなわち]外界の対境(*viṣaya)は存在しない。それ、[すなわち]対境が存在しないので、それを把握するもの(能取)も存在しないので、所取・能取の二つは存在しないが、虚妄分別は存在すると成立している」と、このように『中辺分別論』の中に]出ているので、外界の対象は存在しないので、依他起性は因相として把握されないので、観察されないことが成立すると、[以上のように瑜伽行派の人たちが]考えても…⁵⁾

『中辺論頌』I-3の「対境・有情・我・表識の顕現として識は生じる」(I-3abc)に関しては、『中辺論釈』では対境・有情・我・表識の顕現として生じる識は、注釈されずに単に識としか解釈されていなかったが、『般若灯論広注』では、その識がアーラヤ識と注釈されている。次に、「それ(識)の対象は存在しない。それ(対象=所取)が存在しないので、それ(能取)も存在しない(nāsti cāsyārthas tadabhāvāt tad apy asat)」(I-3cd)の解釈について見ていこう。「それの(asya)」は、『中辺論釈』でも『般若灯論広注』でも注釈されていないが、ともに対境・有情・我・表識として顕現する識と解釈されており、両者に差異は見られない。しかし、「対象(artha)」に関しては、『中辺論釈』では対境(六境)・有情(五根)・我(マナス)・

(152) *Prajñāpradīpa* に引用される *Madhyāntavibhāga* 第1章第3偈の解釈 (新 作)

表識（六識）なる対象と解釈されているが、『般若灯論広注』では外界の対境（*viṣaya）と注釈され、両者において異なる解釈がなされている。ここで、『般若灯論広注』における所取（・能取）が具体的に何を指すのかを考察すると、議論されているのが十八界であること、瑜伽行派の前主張に続く中観派の後主張には、対境・有情と我・表識が所取・能取に相当するものとして説かれている⁶⁾ことから、ここでも所取としての「外界の対境」が、単に六境のみならず、五根も含むものとして説かれていることになる。つまり、『般若灯論広注』では対境・有情・我・表識のうち、対境・有情が所取と我・表識が能取と解釈されているのである。以上見てきた『般若灯論広注』における『中辺論頌』I-3 解釈として特徴的なのは、次の点である。

(1) 対境・有情・我・表識として識（アーラヤ識）は顕現する。「それ（識）の対象は存在しない」の「対象」（所取）は、外界の対境と注釈されている。

(2) その「外界の対境」（所取）は対境・有情と、その所取を把握するもの（能取）は我・表識と解釈されている。

4. 『中辺論釈』および『般若灯論広注』に説かれる『中辺論頌』I-3 解釈の妥当性 以上見てきた『中辺論釈』と『般若灯論広注』における『中辺論頌』I-3 解釈の差異を表に示しておこう。

	対境・有情・我・表識 として顕現する「識」	所取	能取
『中辺論釈』	識	対境・有情・我・表識	識
『般若灯論広注』	アーラヤ識	対境・有情	我・表識

ここまで『中辺論釈』と『般若灯論広注』における『中辺論頌』I-3 の解釈を見てきたが、最後にそれらの解釈が『中辺論頌』の文脈上妥当であるかを検証してみよう。『中辺論頌』I-3 と文脈上関係する I-1ab と I-4ab を以下にあげておこう。

『中辺論頌』

虚妄分別は存在する。そこ（虚妄分別）において二つ（所取・能取）は存在しない。… (I-1ab)

それゆえ、それ（識）が虚妄分別であることが成立した。… (I-4ab)

I-4ab で識が虚妄分別に等しいことが説かれており、I-1ab で所取・能取は虚妄分別＝識のうえに誤って構想されるものということが説かれている。

『中辺論釈』では、対境・有情・我・表識として識は顕現する、その識が能取であると解釈されている。しかし、そのように解釈されるならば、虚妄分別に等

Prajñāpradīpa に引用される *Madhyāntavibhāga* 第I章第3偈の解釈 (新作) (153)

しき識が能取であるということになるので、I-1ab との整合性はとれないことになる。一方、『般若灯論広注』では、対境・有情・我・表識として識（アーラヤ識）は顕現すると解釈されているが、その識（アーラヤ識）は能取とは解釈されていない。文脈上、所取は対境・有情と能取は我・表識と解釈されている。すると、『般若灯論広注』における所取・能取は、虚妄分別＝識のうえに誤って構想されるものということになるので、I-1ab との整合性がとれるのである。

このように、『中辺論頌』だけで文脈を整理する場合、『般若灯論広注』における『中辺論頌』I-3 解釈は、『中辺論頌』の文脈上素直な解釈であるといえるかもしれない。

-
- 1) MAVBh 18.21–19.4. 2) 結城令聞 [1986]『世親唯識の研究』下 (大蔵出版) 149.5–161.17 などの多くの研究で言及されているように、『中辺論釈』では対境・有情が所取と我・表識が能取と注釈されていないが、ステイラマティ作の複注では、対境・有情を所取と我・表識を能取とする解釈が説かれている (MAVṬ 18.15–18.21)。しかしまた、対境・有情・我・表識を所取とその所取に対峙する識を「認識者」(vijñātr) とする解釈も説かれている (MAVṬ 20.1–20.3)。 3) PPTṬ には「我」(bdag) に相当する語を欠く。 4) MAVBh では六境である。 5) PPTṬ(D) za 287b1–5; PPTṬ(P) za 341a5–341b1. 6) PPTṬ(D) za 287b5–6; PPTṬ(P) za 341b2–3.

〈略号〉 MAVBh *Madhyāntavibhāgabhāṣya*. ed. G. Nagao, Tokyo, 1964. MAVṬ *Madhyāntavibhāgaṭīkā*. ed. S. Yamaguchi, Nagoya, 1934, repr. Tokyo, 1966. PPTṬ *Prajñāpradīpaṭīkā*. D: No.3859; P: No.5259.

(平成 23 年度科学研究費補助金による研究成果の一部)

〈キーワード〉 *Madhyāntavibhāga*, *Prajñāpradīpa*, アヴァローキタヴラタ
(東京大学大学院, 日本学術振興会特別研究員 (DC1))